「共感的理解志向の社会科」授業の誕生

（その２）

吉　田　正　生

北海道教育大学旭川校社会科教育研究室

北海道教育大学紀要（教育科学編）

第 53 巻　第1号　別　刷

平成　14　年　9　月

北海道教育大学紀要（教育科学編）第53巻　第1号
Journal of Hokkaido University of Education (Education) Vol. 53, No.1

平成14年9月
September, 2002

「共感的理解志向の社会科」授業の誕生

（その2）

吉　田　正　生

北海道教育大学旭川校社会科教育研究室

目　次

問題の所在
　論文の目的と方法，研究の意義など
第1部　誕生編
Ⅰ章　東京都大田区立大森第六小学校における「共感的理解志向の社会科」授業の誕生
　(1)　中野重人からの聞き取り調査を軸にして（以上，前号掲載）
　(2)　大田区立大森第六小学校の元研究同人からの聞き取りを軸にして（①～②―2迄，今号掲載）
　(3)　小括
Ⅱ章　長野県上田市立東小学校における「共感的理解志向の社会科」授業の誕生
　(1)　中野重人からの聞き取り調査を軸にして
　(2)　上田市立東小学校の元研究同人からの聞き取りを軸にして
　(3)　小括
Ⅲ章　岐阜県岐阜市立長良東小学校における「共感的理解志向の社会科」授業の誕生
　(1)　中野重人からの聞き取り調査を軸にして
　(2)　岐阜市立長良東小学校の元研究同人からの聞き取りを軸にして
　(3)　小括
Ⅳ章　小学校社会科教科書における「共感的理解志向の社会科」記述の誕生
　(1)　中野重人からの聞き取り調査を軸にして
　(2)　教科書編集者からの聞き取りを軸にして
　(3)　小括
第2部　浸透編
Ⅴ章　北海道旭川市及びその周辺地域における浸透について
　(1)　北海道教育大学教育学部附属旭川小学校の場合
　(2)　旭川市教育研究会社会科部会の場合
　(3)　上川教育研修センター研修講座（小学校社会科）の場合
　(4)　小括
成果と課題

Ⅰ章　大森第六小学校における「共感的理解志向の社会科」の誕生

(2)　大田区立大森第六小学校の元研究同人からの聞き取りを軸にして

①　田中先生への聞き取り調査に至るまで

①－1　なぜ，大森第六小学校か

平成13年３月30日，東京都大田区に住んでいる田中かよ子先生[①]に会うことができた。前日に大森第六小学校の教頭先生が，田中先生と連絡をとってくれたおかげであった．

長い間，中野重人の『社会科評価の理論と方法』に載っている大森第六小学校の「わたしたちのくらしとゴミ」（以下，「ごみの学習」）の指導案がどのような経緯で生まれてきたのかを，作成に携わった田中先生からじかにお聞きしたいと思っていた．この指導案に見られる教授方略こそ，まさに「共感的理解志向の社会科」そのものだからである．この教授方略が生まれた経緯を明らかにすることは，「共感的理解志向の社会科」誕生の経緯（少なくともその一つのケース）を明らかにすることになる．また，筆者自身，大森第四小学校の卒業生であり，母校の近くの小学校の実践ということで個人的な興味もあった．

３月29日に大田区教育委員会を訪ねた．応対してくれた浦部指導主事から，田中かよ子という先生には心当たりがないから，もう退職されているか，他区に出られているのだろうということ，しかし大森第六小学校の研究物なら池上本門寺近くにある大田区教育センターに保存されているということを告げられた．浦部指導主事がセンターに電話をしてくれ，研究物が確かにあることを確かめるとともに，これから筆者が行くので閲覧の便宜を図ってくれるようお願いをしてくれた．

雨の降るなか，蒲田から池上線に乗り二駅先の池上駅で降りた．池上には，筆者の高校時代の友人が今も住んでいる．彼は大学を卒業した後，国家公務員試験を受け文部省のキャリアになった．本門寺の御会式のときに来ないかと誘われたことがある．筆者がまだ大学生だった頃の話である．そのときは用事があっていけなかった．したがって，本門寺には小学１年生のときの遠足以来行っていない．

教育センターは駅から歩いて５～６分のところ，本門寺がある小山の麓にあった．駅前の商店街を抜け，池上本門寺の石段を正面に見て右手に折れたところに池上小学校がある．さらにその奥が大田区会館で，センターはその４階であった．

受付で来意を告げると，職員の方が書架から，研究紀要と指導案集をとってきてくれた．研究紀要を読み，大森第六小学校の当時の研究テーマが「一人一人の学ぶ力を高める指導の工夫――特に関心・態度の評価を通して――」であったことをはじめて知った．昭和56年12月に行われた公開研究会当日に配付された研究紀要には，テーマ設定の理由について，次のように書かれている[②]．

> 新しい学習指導要領が実施され，「自ら考え正しく判断できる子どもの育成」という教育理念を生かすため，本校では，「よく考えてやりぬく子ども」を教育目標の重点にすえ，教科指導（国語・社会・算数・理科）の領域からその実現をめざす研究に取り組んだ．
>
> 本テーマの設定にあたっては，子供の実態分析結果をよりどころにしながらも，知識や技能などの特定の能力育成に片寄りがちな指導の反省，さらに子供が生涯にわたって生きてはたらくであろう能力や態度を育てることをも志向し，研究をすすめてきた．

これをさらに詳しく説明した文章には，「子供一人一人の情意面を的確に見取り，それを高める指導を試み，

現在もっている諸能力を十分発揮させ，子ども自身が自己を変革させる力を育て」ることをより具体的な方針とすること，そして「学ぶ力」をつけることを目標とすると書かれている③．さらに「学ぶ力」を定義し，「『学ぶ力』とは，特定の能力をさすのではなく，『言語や操作活動を通して，学習のサイクル（問題の意識化→探求→整理・発展）を子ども自身が回転させ，自らの論理を構成し，自己を確立していく意欲や態度である』と把えた」④としている．要するに自分なりの考えをもとうとする意欲と実際に自分なりの考えを持つことのできる力をもった人間の育成がめざされていたのである．

このように「自己を確立していく意欲や態度」を育てるとは書かれているが，「共感的理解」という言葉も「自らできることに取り組む」という言葉も見られない．したがって，「共感的理解志向の社会科」は大森第六小学校全体の研究の中から生まれてきたというよりは，社会科部会の部員の相互作用のなかで，すなわち，大森第六小学校全体の研究テーマを社会科という教科におろしてきたときには，どのような力を育てればよいのか，そのためにどのような授業を構成すればよいのかを話し合う中で，生み出されたものということになるのであろう．

昭和56年度当時，社会科部会には，田中かよ子（1年1組担任；研究推進委員），市原範子（4年1組担任），菅良則（5年2組担任）の3人がいた．研究推進委員でもある田中先生は，社会科部会を理論的にも実践的にもリードしていく役割を担っていた．

教育センターで，これまで見たことのなかった「ごみの学習」の指導案の「本時の展開」以外の部分も読むことができた．「本時の展開」部分だけを読んだときよりも，単元への導入がずっと丁寧に且つ子どもたちの知的興味を掻き立てるように工夫されたものであることがわかった．また，指導案の項目名から，児童中心主義の教育思想あるいは「社会科の初志をつらぬく会」（以下，「初志の会」）の影響を受けていることが推測できた．「ごみの学習」は研究紀要に社会科編の〈実践事例2〉として載せられており，「子供の追求心を大切にする社会科」というタイトルがつけられている．はじめの項目が「1．単元名」，次の項目が「2．本単元と子供のすがた」となっており，ここが上に述べたような教育思想なり「初志の会」なりの影響を感じさせられたところである．一般的には「本単元と子供のすがた」とせずに，単に「単元について」としか書かないからである．もちろん，そこに児童の実態が書かれている場合であってでもである．

「本単元と子供のすがた」は，次のような書き出しで始まる．

> 「えー！ごみなんか調べるの．きたないなあ．」本単元に入る前，「各自の家から出るゴミを調べてみよう」といったときの子どもたちの第一声である．各家庭で出るごみは子供たちにとって縁のないものであり，汚いものでしかなかった．自分でゴミを捨てた経験のある子供もかなりいるのだが，もちろん自分から進んで手伝ったわけではない．しかし，子供たちに授業の中で，東京都の1日のゴミの量がゴミ容器を立てて富士山の230倍であるということ，横に並べて山の手線で22.5周もあることを具体的に示したときの驚きが，そのまま子供たちの課題意識へとつながっていった．

中野重人の著書で「本時の展開」部分だけを読んだときに受けた印象は，もっと性急に「ゴミを減らすために私たちにもできることはないだろうか」と子どもたちに考えさせている授業というものであったが，知的興味をかなり大事にした授業だったと印象を新たにした．いよいよ田中先生に会う必要を感じた．

そこで帰り道，大森第六小学校に寄り，田中先生のご住所なり転勤先を教えてもらうことにした．池上線で再び蒲田に戻り，教えられたとおり東口から大森行きのバスに乗った．大森西2丁目で降りるようにと教えられたのだが，間違えて一つ手前の富士見橋という停留所で降りてしまった．しかし，その停留所のそばを流れている川は，筆者の知っている川であった．中学生の頃，この川沿いに自転車で池上の大田区立図書

館まで行ったことがある．今でこそ，大田区のあちこちに区民のための様々な公共施設ができているが，筆者が中学生だった頃（昭和30年代後半）には，公共の文化施設は京浜東北線の線路の向こう側に行かなければなかった．海岸沿いにある大森第四小学校の学区は文化施設により遠く，京浜急行と京浜東北線の間にある大森第六小学校の学区は，まだ文化施設に近かった．それは，学区に住む住民の文化程度と学歴の差の現れでもあった．京浜東北線の線路から海岸に向かって進むほど「文化剥奪」の度合いは高く，総体的に住民の学歴は低かった．

内川というその川沿いに歩いて，大森第八中学校の横に出た．そこから環状７号線の方向に折れた．あまり大きくない個人住宅や小さな町工場，個人商店が車がようやくすれ違えるほどの道沿いに続いている．これが，大森第六小学校に通う子どもたちの暮らす町である．学区内に残る緑はおそらく大森第六小学校のすぐ近くにある諏訪神社の境内と環状７号線沿いにある浅間神社の境内，そしてところどころにあるさして大きくない公園にみられるものぐらいであろう．

途中，道を一度だけ尋ねたが，すぐに大森第六小学校を見つけることができた．はじめて見る学校だったが，何か懐かしさを感じながら入っていった．昇降口には卒業を祝う掲示物がはられていた．

一学年一学級，全校児童数が百数十名の規模の小さな学校になっていた．昭和53年に明治図書から出された同校の著作，『子どもが前面に出る教育』には「児童数450，13学級」[5]とあるからこの二十数年の間に児童数はおよそ３分の１に，学級数は半減したことになる．学区内には家がぎっしり建っているから，住民が少なくなったのではなく，子どもが少なくなったのであろう．『子どもが前面に出る教育』のあとがきに，1978年時点で開校38年とある．昭和15年に大森第二小学校から分離して創設されたのである[6]．

職員室に案内されると，教頭先生が応対してくれた．女性であった．用件を述べると，てきぱきと処置をしてくれた．教育センターで見せてもらった研究物以外に，昭和56年３月に出た「中間報告書」のあること，また田上昇校長のもとで始まった研究の成果をまとめて，昭和53（1978）年に『子どもが前面に出る教育』という図書を出版していることを教えられた．「中間報告書」はすぐにコピーさせてもらえた．しかし，田中先生の住所や電話番号は教えてもらえなかった．

「田中先生は，５年前に退職されています．住所や電話番号を外部の方にお教えするというわけにはいきませんので，私が間に立たせていただきます．先ほど先生がコピーをされている間に，田中先生のところにお電話を差し上げたのですが，ただいまお留守中ということでしたので，後でまた私の方から田中先生のところにお電話を入れるようにします．晩にでも，先生が今居られるところに，田中先生から電話をかけていただくようにします．」

その晩（平成13年３月29日），田中かよ子先生から電話をいただいた．その電話で，「ゴミの学習」の指導案で実際に授業をやったのは市原範子先生であること，その指導案は個人がつくったというよりは部会で話し合いながら共同でつくったものであること，そのことは中野重人先生にもお話したことがあるということ，中野先生には研究発表会のときにお会いしたぐらいであることなどのお話を聞いた．もう教師を辞めて５年も経つのでお役に立てるかどうかと躊躇されていたが，20年前の「関心・態度」が盛んに言われていた当時の大森第六小学校の研究のことをお聞かせいただきたいということで，インタビューをお願いした．それなら「真っ只中」にいましたからということで会っていただけることになり，30日（金）の１時30分，京浜急行平和島駅の改札口で待ち合わせということになった．平和島の駅からお宅までは７～８分ということであったが，わかりづらいからということで迎えにきてくださることになった．こうして，田中先生に会えることになったのである．

①－2　大森第六小学校の子どもたちの生活圏のようす

30日１時半より少し前，平和島駅に着いた．もう40数年も前のことになるが，筆者は毎日母親に手を引かれて，当時，「学校裏」と呼ばれていたこの駅の横を通り，救世軍が開設していた保育園に通っていた．

園長先生は，救世軍の制服に身を包んだ柔和な目をした方だった．昭和27年５月21日，遠足で浜離宮に行った．その時の記念写真でも園長先生は，制服姿で写っている．やさしい女性の先生がいたことも思い出す．オルガンに合わせてお遊戯をやったり歌を歌ったりしていた．保育園は，商店街の中にあり通ってくる子どもも近くの商店街の子どもが多かったような気がする．店の仕事をするために小さな子どもを見るゆとりがなく，預けていたというような親もいた．母が勤めていた私もそうだった．保育園が終わると，母の勤め先であった大森区検まで歩いていき，母の勤務時間が終わるまで，近所の子どもたちと近くの原っぱで遊んでいた．京浜工業地帯の子どもたちも，東京オリンピックの頃までは原っぱなど自然の中で遊ぶことができたのである．

駅の周りにはその頃を偲ばせるものは何もない．京急ストアがあり，小さな個人商店が駅前に固まっている．29日に駅から区検まで歩いてみた．まるっきり様子が変わっていた．幼いころ遊んだ原っぱはなくなり，大森区検とその隣にあった簡易裁判所もなくなっていた．あとには大森警察署が建っていた．

区検が面していた広い通り（＝澤田通り）が環状７号線の一部になっていた．材木商など個人企業と思われる建物が多い．大森第六小学校は，平和島の駅や大森警察署から見れば，環状７号線の反対側にある．

したがって，このあたりは，大森第六小学校の学区ではないにしても，大六（おおろく）の子どもたちの生活圏になるのであろう．車，道路，建ち並ぶコンクリートの建造物．『子どもが前面に出る教育』にある「１年１組」の学級経営案には，子どもをとりまく環境として，次のようなことが書かれている．

子どもをとりまく環境
・地域の制約
　自然に恵まれない遊び場の少ない環境
・社会環境
　家内工業商店経営10　　外勤28
・家庭環境
　欠損３　　保護７　　かぎっ子７（帰宅時）

このクラスの児童数は，男子19名，女子19名，合計38名であった．そのうちの10名が欠損家庭あるいは保護所帯になっている．自然に恵まれないだけでなく，社会的弱者が多い地域でもある．救いは「生活力のある子どもが多い」と書かれていることだろう．

大田区は，ごく粗く言うと，京浜東北線の線路を境にしてその相貌を大きく変える．京浜東北線の外側，すなわち海岸寄りは大森第六小学校の学区がそうであるように，中小の工場や町工場，そしてそこに勤める人々が住む家やアパートが建ち並ぶ．川はカミソリ護岸になっているか暗渠にされ，人々の暮らしからは遠くなっている．昭和39年の東京オリンピックの前後から，昔から浅草海苔の養殖に携わっていた人々が転業や転居を余儀なくされ，川からはその人々が使っていた舟が消えた．そうした舟の繋留のために必要だった川は不要となり，暗渠にされたり大人の背丈を越す防潮堤で囲まれたりして，いくつかの川は人々の視界から消えた．転居したり転業した海苔養殖業者の住居は，アパートに変わったり，小さな町工場に変わったりした．その広い敷地の中には海苔の乾燥場や畑があったが，それらも時代の波の中に消えていった．町は急速に京浜工業地帯の色一色に相貌を変えていった．

他方，京浜東北線の内側には，山王や久が原，田園調布など高級住宅街もあり，基本的には中流以上の階層の人々が多く住む住宅が広がっている．都内であるにもかかわらず，自然に恵まれている地域が多い．

十年程前に大森第四小学校の学区を歩いたことがある．筆者が生まれてから十数年を過ごした工場があったまわりの様子はすっかり変わっていた．中規模の工場が姿を消し，高層のアパートが建っていた．大森第一中学校の横に広がっていた「一中のグランド」（正確には，ある石油販売会社の所有地であったが，子どもたちはそう呼んでいた）．そこは日曜日に大人たちの草野球チームが集まって来るところだった．バックネットが８面もある巨大な原っぱだったが，東京都の森ヶ崎下水処理場に変わっていて，往時を偲ばせるものは何もない．筆者がともに少年時代を過ごした遊び仲間は，付近の中小工場に勤める家庭か海苔養殖業の家庭の子どもたちだった．そうした人々の多くは大田区を後にし，都内や近県のどこかに消えていった．そして，今はまったく見知らぬ人たちが住む見知らぬ町になった．いくつもの近隣集団が消えていったのだ．

大森第六小学校の学区の場合はどうなのだろう……．

１時30分を少し回ったころ，田中先生が来られた．初対面であったが，向こうもすぐにわかったようだ．お互い，簡単に自己紹介をした後，駅前を通る京浜第一国道をわたった．

田中先生と連れ立って歩いている途中，先生は実に多くの方と挨拶を交わしている．大森第六小学校，入新井第五小学校で長い間教えていた関係で，昔の教え子の親とすれ違うことが多いという．入新井第五小学校は田中先生ご自身の母校であるということも話していただいた．大六や入五（いりご）の学区は，人口移動がかつての大四（おおよん）の学区よりは少ないようだ．

「最後の勤務地が母校だったというのは，幸せなことだったかもしれません．」

筆者のように居を転々としている人間には，重い言葉であった．歩きながら，美原通りが旧東海道の一部であることを田中先生から教えていただいた．おそらく海岸沿いの松並木のある道だったのであろう．

筆者は大田区で生まれ，高校生の頃まで住んでいたにもかかわらず迂闊にもそのことを知らなかった．美原通りが京浜第一国道にぶつかるところから程遠からぬ辺りに半年ほど住んだことがある．入五の学区になるのだろう．親戚の工場が東京オリンピック後の不況のあおりで倒産し，十数年その敷地内に住んでいた我が家も転居先を見つけなくてはいけなくなった．母と二人で神奈川県に越す前のことであった．昭和40年の秋から翌年の４月までのことであった．もう，30数年も前になる．大田区の町工場は，景気の波をまともにかぶる．大四の学区より安定しているように思えても，大六の学区の人々もずいぶん入れ替わっているのかもしれない．

①－３　聞き取りのために

お宅に着いて，改めてご挨拶をした後，すぐに聞き取りをはじめた．中野重人の影響がどの程度のものかをみるために，次のような質問から話に入った．

「中野先生は，大森第六小学校に，どれくらいおいでになったのでしょうか？」

この質問のほかに筆者があらかじめ用意していた質問は，次の五つであった．

- 中野先生から，社会科授業のつくり方について何らかの示唆を受けたのか
- 大田区の指導主事の助言は，具体的な授業づくりのどの部分に生きているのか
- 共感的理解をてこにして，子どもたちに社会のために自分なりにできることを考えさせるという（「共感的理解志向の社会科」の）授業構成のアイデアは，どこから得たのか
- 社会的態度と学習態度を分けるというアイデアは，どこから得たものなのか
- 研究紀要等の執筆分担はどうなっていたのか

以下，田中先生から聞き取ったことを再構成して記述する．

② 聞き取りから

②－1 大森第六小学校の社会科と中野重人

中野先生が大六に来てくださったのは，……そう，発表会のときに来てくださいましたね．中野先生が助言者だったことはありませんでしたから，社会科の授業について教えていただいたということはありませんでした．中野先生が大六の研究に興味をもたれたのは，私たちの研究の助言者として来てくださっていた白石先生[7]が，私たちの指導案を中野先生にお送りしたからだろうと思います．私が書いた元原稿を『これ，送っていいかい』とおっしゃって，中野先生のところに送ったんです．

中野先生がそれをお読みになって，大六の公開のときにきてくださったり，研究会に誘っていただいたりしました．

中野先生は，研究会をもっていらっしゃって，その研究会に白石先生もお出になっていたようです．いろいろ中野先生から教わっていらっしゃったのではないでしょうか．私も研究会に来ないかと誘っていただいたのですが，ちょっと行けないということで，結局一度も行かないままになってしまいました．お電話をいただいたりもしたのですが，行かれませんということで，お願いされた原稿だけを書いてお送りするということになりました[8]．

ですから，中野先生から社会科の授業について何かを教えていただいたということはありませんでした．この「関心・態度」の研究のときに一緒に指導案づくりをやってくださったり，いろいろ教えてくださったのは，大田区の教育委員会の白石先生でした．白石先生の前に，私たちの研究の指導をしてくださっていたのは，新見先生[9]でした．

新見先生というのはおもしろい方で，私たちと一緒に指導案を考えていますよね．それで私たちが用事があって席を離れたりして戻ってくると，カードがいっぱい並んでいるんですね．それで，「こんな風に授業を考えてみたけど……」って言ってくださるんです．カードを使って授業を創るという方法は，新見先生から教わりました．

【インタビュアー註】白石裕一指導主事による田中実践の紹介

のちに白石は，1・2年生において育成したい社会的関心や態度について，それはどのようなものか・どのような手だてがあるかなどについて論述している．

育成したい関心・態度については，第一学年の「社会的事象に対する関心・態度」及び第二学年の「社会的事象に対する関心・態度」という一覧表によって，低学年社会科の全単元にわたって示された[10]：その一部が，次頁に掲げた「表Ⅰ－1」である．

また，関心・態度育成のための具体的手だてとして示したのが，次頁の「表Ⅰ－2 社会的事象の関心チェック表」である[11]．

田中は，インタビューの中で「『関心・態度』の研究のときに一緒に指導案づくりをやってくださったり，いろいろ教えてくださったのは，大田区の教育委員会の白石先生でした」と語っているが，「いろいろ」ののなかには，このような具体的なことまで入っているのだろうか．

平成14年2月に白石の執筆部分をコピーして田中に送った．2月21日付けで送られて来た手紙によれば，表Ⅰ－1の各単元の「達成目標」や「評価基準一覧」については，「覚えがありません」ということであった．つまり，これは大六小のものをもとにしたものでもないし，大六小の研究に白石が関わっていたときに，白

石が提示したものでもなかったということになる．

では，白石から大六小の研究同人は何を教わったのだろうか．白石の文章及び指導主事という白石の立場から判断すると，社会科における関心・態度をどうとらえるかという基本的・理論的おさえ，そしてそれを評価する方法として一般的にはどのようなことがいわれているのかについての知識であった可能性がある．

社会科における関心・態度などについて，白石は次のように書いている[12]．

一般に社会科での関心・態度は，
①社会的事象そのものへのもの
②社会的事象のもつ社会的意味へのもの
③社会的意味を身につけたもの
に大別することができる．

表Ⅰ－1　第一学年の「社会的事象に対する関心・態度」

単元名	単元目標	達成目標	評価にあたっての着眼点
わたしたちの学校	○わたしたちの学校には，教室その他の施設があり，たくさんの人が勉強していることに気づかせる．	○学級には大勢の同年令の仲間がいることに関心をもつ． ○学級にある共用の施設や道具の存在を認める． ○観察したことをもとにして，学校の様子を絵図にすることに興味をもち，意欲的に学ぶ．	○学級の友だちの存在に関心を示す． ○教室内にある施設や道具の利用に協力できる． ○学校には，自分たちのほかにも大勢の人や施設のあることにに興味を示す．

（以下，略）

表Ⅰ－2　社会的事象の関心チェック表［がっこうではたらくひと］5／7～5／31

評価場面	○遊び時間や放課後，先生にどんなことを話しかけてくるか気をつける．	○先生の仕事を，授業の中で発表させたときに観察する．	㈱学校にいるおじさんやおばさんの仕事を，授業の中で発表させたときに観察する．
評価項目	○先生が仕事をしているときに，「何をしているの」とたずねてくる．	先生（受けもち，担任以外）がしている仕事をよくみていたくさん発表する．	◎学校にいるおじさんおばさんの仕事をよく見ていて，たくさん発表する．

いとう　かずこ	あさの　かずお	わだ　かよこ	ゆば　かずと ×（参加せず，手いたずら）
こばやし　たけし （発）「校庭に水をまいていたよ」	やべ　じゅんこ	しまざき　あきお （発）「廊下をモップで……」	いなば　まきこ
さとう　かおり	さいとう　けんぞう ・「ぼくたちの給食を運んでくれた」	とだ　えいこ	あさみ　けいた （発）「庭（ママ）の木の枝をきっていたい」

（※子どもの氏名は仮称である）（発）～発言　（ふ）～ふきだし　（つ）～つぶやき